



・・・そして、大分へ。
南海部 覚悟

「――だからあの晩、あなたが私を強姦したからでしょ！」

「ベッドに押し倒したのは、確かに私でしたけどお、先に指を入れたのは玲子さんですからねえ、単純に私が強姦したって云うのは、違うんじゃないですかぁ？」

非番の早朝から、夫婦？ではなく婦々喧嘩です。

笑子は既に警視庁の女子寮を引き払い、玲子のマンションで同棲生活を始めていました。

居住する自治体へ同性パートナー公認証明願（婚姻届）を提出し、警視庁にも同様の申請を上げていました。これにより、国内に存在する全ての国家機関、政府機関、自治体、公共団体、公益法人、企業、営利団体は、同性パートナーを理由として、一切の不利益を課すことが法律で禁止され、異性パートナーと同等の権利・義務が担保されます。社会全体の風潮が、同性カップルの存在を認め、秘匿するのではなく広く公開する方向で、様々な誤解や軋轢を防ごうとする方向に流れつつありました。

夫婦喧嘩は異性・同性を問わず、お互いの愛情の現れでもあるのですが、こと女と女の場合、従属感覚や依存意識によって抑々の原因をお互いなかなか認め得ず、諍いが長くなる傾向があります。

また、口論の間に交わされる性的・生理的な表現の中には、第三者が思わず赤面するようなどぎついものも多く、外から見れば確かに犬も喰わぬ論争には違いありません。

「あなたこの前、両腕が邪魔だからって、近くにあったロープで私を後ろ手に縛りあげたでしょ。そんな変態だって思ってもみななかったわ！」

「ちゃんと、了解取りましたよ！そしたら眼の周り紅くして、縛って！縛ってって・・・玲子さんだって、指だけじゃ面白くないってキュウリ使ったじゃないですかぁ。」

「ちゃんと、アルコールで消毒したわよ！」

「――そんな事じゃなくって！」

どっちもどっちです。その時、玲子の携帯に柴田からTELが入りました。

「緊急招集よ！東京タワーで会社役員が、銃撃されたんですって・・・。」

東京タワーは、トップデッキ（特別展望台）の屋上に、柵で囲まれた露天のオープンテラスが新年度から公開されていました。競合する都内高層ビルの展望台高さが、既にトップデッキのそれを越え、スカイツリーの“634mトップツアー”の営業受付開始が、タワー運営会社の危機感を煽っていました。



「笑ちゃん、私行かないからあなた視てきて・・・。」

屋上階段の入り口で、玲子が愚図っています。

「被害者は女性ですよ！専従班の班長が現場視なくてどうするんですか・・・。」

「被害者が女性だからって、被疑者が女性とは限らないじゃない・・・現場視なくたって写真があれば大方見当つくわよ。」

「ダダ捏ねてないで上がってきてください！大したことないから。」

嫌々ながら階段を上り、恐る々立ったその足元の床に、一塊の血痕と、それを囲うように人型のマーキングが記されています。

「なに？血の跡これだけ。さっき下で被害者運び出すとき、貫通銃創だって云ってたじゃない・・・。」

「滴下血痕はこれだけです、周囲に飛沫血痕は殆ど確認できません。」

臨場した若い鑑識官が答えます。

「だったら、銃撃じゃないんじゃないの？何か鋭い錐みたいなもので・・・。」

「銃創としたのは検視官です、内部組織の反転曝露が確認できなかったのが理由のようです。」

「朝っぱらからこの被害者、こんなところで何してたのかしら？」

笑子が、所轄の刑事から仕入れた情報を伝えます。

「メインデッキ・トップデッキを借り切ったの夜間パーティーだそうです。会社の創立記念日で、毎年恒例のようですよ。」

「東京タワー借り切って徹夜のパーティー？気が知れないわ・・・もういいでしょ、下に降りましょ。」

地上に降りてほっと息をついた玲子が、“受付”と書かれたテーブルで待機するサラリーマン風の中年男性に警察記章を提示して、「パーティーを開かれた会社の方でしょうか？少しお話をお伺いしたいのですが・・・。」

「総務担当の者ですが、展望台から社員が降りて来始めるまででよければ、お答えいた

します。」

「失礼ですが、総務の方は一晩中この受付で？」

「パーティーの開始前と終了後に此処で待機します。」

「朝まで何人くらいタワーに残っていたのですか、全員ってこともないかと思いますが・・・。」

「開始から終了まで、メインデッキと地上の間のELVは停止させます。余程緊急なことがない限り、誰も途中で帰りません。パーティー終了時に特別ボーナスも支給されますので。」

「じゃ今回、途中で帰られた方は？」

「———体調を崩された3名だけです。」

翌日、本部会議室で捜査一課及び機動捜査隊の合同捜査会議が開かれました。

担当の第二機動捜査隊長が初動捜査内容を説明します。

「被害者は、綾部法子38歳、株式会社綾部建設の執行役員であり、創業者の孫に当たります。」

「一昨日21時より昨日9時まで、当該株式会社がタワーを借り切り、恒例の社員パーティーが開催されていました。全国に約500名の従業員を有する中堅の建設会社ですが、社員パーティーは年二回、東日本と西日本に分かれて行われます。今回は東日本の210名が参加し、社員以外のパーティースタッフ・コンパニオン・コック・バーテンダーを合わせますと、総勢248名がタワー内で一夜を過ごしたことになります。」

「メインデッキ及びその屋上のオープンテラスがパーティー主会場となり、様々なイベント・ダンス・カラオケ大会・ゲーム大会が模様されました。」

「——トップデッキは？」一課長の柴田が口を挿みます。

「トップデッキと屋上のオープンテラスは、休息スペースの扱いで、小さなバーカウンタが設置されていました。」

銃撃現場の解説は、玲子たちがタワーで話した若い鑑識官が担当します。

「ご遺体は、テラスの手摺の手前、トップデッキからの階段のすぐそばに仰向けで倒れていました。血痕はご遺体の下の滴下血痕、飛沫血痕は手摺の一部にごく少量残されています。弾丸・薬莢等遺留物、銃撃に伴う硝煙反応等、確認できませんでした。」

「——指紋は？」

「ステンレス製の手摺に、被害者のものを含め複数の指紋が採取されました。床から採取しました少量の土、及び植物の断片を加えて、現在解析中です。」

「——鑑識の現時点の見解としては？」

「手摺に掴まって、夜景を見ているのを背後から銃撃したものと鑑定します。ご遺体の銃弾射出口から曝露された飛沫血液・飛沫組織の殆どは空中に飛散し、落下拡散したものと考えられます。従って、弾道鑑定は不可能です。現在、タワー直下の舗装面、植え込み等において弾丸をはじめ遺留物を捜査中ですが、時間を要すと考えます。」

「——凶器の銃もまだ見つからんのか？」

「タワー内外を鋭意捜査中ですが、発見に至りません。」

「検視官の解説をお願いします。」機動捜査隊長がマイクを渡します。

「銃弾は左後頭部から射入し、頭蓋を貫通して右眼窩から射出しています。射入口に微細な熱変質があったのと、組織の反転曝露を確認できなかったのも、銃創と判断しました。司法解剖の結果を待たないと断定できませんが、射入口の大きさから恐らく22口径、銃撃を受けて約5時間後の検視と判断します。」

「5時間後なら午前4時か、明け切らずにまだ暗い頃だな・・・社員への事情聴取は？」

機動隊長が再びマイクを取って答えます。

「メインデッキ・トップデッキに残っていた社員に対して所持品検査も含め、昨日半日をかけて行っています。パーティースタッフを含め245名の聴き取りが完了したのは、昨日15時でした。」

「――残り3名は？」

玲子が手を上げて答えます。

「パーティー中に体調を崩して退場したようです。2名は近くのクリニックに、1名はそのまま自宅に帰ったのを確認、裏も取れています。」

「――何時頃だ？」

「対応した総務課の社員によると、午前1時ごろ3人一緒に退場したそうです。3人とも同じ部署の社員で、4日前から残業が続いていたようです。」

「午前1時なら事件に関係ないか・・・社員やパーティースタッフで銃声を聞いた者は？」

「聴取した範囲で誰もいません・・・ただし、現場に近いトップデッキにいた社員は、ほぼ全員ソファーで仮眠を取っていたようですので、気付かなかったのかも・・・。」

「バーテンダーが居たんだろ？」

「丁度その時間、メインデッキの応援で、下に降りていたようです。」

玲子が再び手を上げます、機動隊長が指名すると、「鑑識課に質問します、被害者は仰向けに倒れていたとのことですが、背後から銃撃されて仰向けに倒れることがあるのでしょうか？」

先程の若い鑑識官が答えます。

「着弾時点で頭部を含む被害者の体は、一旦前方へ押し出されます。胸部及び両肩が手摺に接触すると、首の付け根を中心として頭部がお辞儀をするように回転します。その反動と弾丸射出時のエクспロージョンによって、今度は後方に撓ります。重い頭部が後方に仰け反ることによって、そのまま仰向けに倒れます。」

「と云うことは、被害者の頸部には相応の損傷が残る筈ですね・・・。」

鑑識が答える前に、総務課員からメモを受け取った柴田が立ち上がります。



「大学病院から連絡が入った、司法解剖の結果だ。“当該遺体、頭部の創洞生成原因の特定不能、一般的な銃創とは明瞭な相違あり”つまり、頭部の致命傷がどうやって出来たか、解らんってことだ！」

「―――ねえ、笑ちゃん。もう一度タワーのあのテラスに行ってみない？」

「あれえ、あんなに嫌がってたのに・・・大丈夫なんですかあ？」

「その代り、ずっと手を握っててね・・・。」

地上250mのトップデッキの屋上では、その日も数人の鑑識課員が、遺留物の収集捜査を継続していました。

オープンテラスの手摺は、上下に太いステンレスのバーがあって、その中間は透明の亚克力パネルで覆われています。

「被害者の身長は、丁度あなたと同じ位よね・・・どう思うこの手摺？」

「女性にするとちょっと高過ぎますね、亚克力パネル越しに下界を見下ろす感じ・・・安全の為でしょうけど。」

「下のバーに足を乗せて、上のバーを掴んでみて・・・。」

「これなら、遮るものが無くて快適です、こうやって両手を伸ばせば白い雲が手に取るように・・・。」

「その格好で撃たれたんだわ・・・きっと。」

「―――後ろから？」

「いえ、前から・・・。」

「―――前って、先輩。前は空ですよ？空気ですよ？」

その時玲子は、正面に建つ3棟の高層ビルを見詰めていました。

振り返った視線が、タワーの鉄骨の一部を凝視します。

「鑑識さん、この傷は？」

近くで作業する鑑識課員に声を掛けると、「写真を撮って付着物の解析中です、塗料が剥離した金属面に腐食がありませんから、ごく最近の傷ですね。」

「―――銃弾の痕？」

「ではないと思います、銃弾なら塗料の同心円状の剥離痕と共に、鉄骨の塑性変形が残ると思うんですが、それは溶接切断されたような痕ですね。」

「司法解剖の報告書、読まれました？」

桜田門に帰る車の中です。

「―――読んだわ、解剖医がまず注目したのが、銃創だとされる頭部の創洞(貫通した穴)に毛髪や表皮の圧入が無かったこと。創洞周辺組織の圧排や裂創も確認できなかった、代わりに毛細血管の熱凝固が確認されたと書いてあったわ。」

「撃たれた方向については？」

「一般に射入口には挫滅輪という表皮の剥脱が見られるが、今回二つの創口に関して確

認できない。検視官の指摘する微細な熱変質に関しては、毛細血管の熱凝固に連続して双方に存在する、抑々当該創洞が銃弾が高速で移動した痕跡だとする判断に対して、担当医として多大な疑いを感じる・・・って結んでたわ。」

「頸部の損傷は？」

「——無かったみたい。」

「検視官は、“反転曝露”がないから銃創だって云ってましたよね・・・。」

「反転曝露て云うのは、錐とかアイスピックといった尖った刃物で、刺して引き抜いたとき、刃物に付着して組織が傷口から引き出されること。だから刃物による殺人じゃないって、判断したと思うの。」

「何が被害者の頭部に穴をあけたか・・・それは今の段階で解らない。だから未知数Xとして、明日から被害者周辺の間人間関係を中心に捜査して、方程式を解いていきましょ。」

「でも柴田一課長は、やはり背後から銃撃されたって考えているようですね。」

「そうね、或る意味密室殺人だから、被疑者はタワーの中にいた社員以外にないようにも受け取れる・・・でも、違うわ。」



組織内の噂話を収集して歩くのは、笑子の特技でした。その明るくて快活な性格を前面に押し出して、総務課・業務課のOL達から、社内秘とされる社員の人間関係をも含めて、大量の情報を集めてきました。

警察車両の後ろのシートで、一心に化粧を直す玲子を見ながら、「先輩、暇そうですね〜。」

「どう、被害者に関して何か分かった？」

自分の大きなシステム手帳を拵げながら、笑子が報告します。

「綾部法子、執行役員としては主に企画・設計部門の指揮を執っていたようです。コンプライアンス本部の本部長でもあります。」

「——コンプライアンス？」

「綾部建設の売り上げの大半は、首都圏の学校施設の新築・増改築に伴う建設工事です、つまり公共工事です。人口減少に伴い、自治体の工事発注件数も減少して、所謂業者

間談合が横行する世界です。」

「綾部法子は、談合に強く反対していたようです。ひとつの設計に対して複数の業者が応札するから競争が生まれる、過剰な価格競争を忌避する為に、行政を巻き込んで慢性的な談合が繰り返される。そこには身勝手な外部業者排除の論理も存在する・・・と云うのが彼女の口癖だったようです。」

「――それで？」

「都議会の与党勢力の一部と協力して、企画提案型の学校施設建設事業を提唱していたそうです。企画・設計・見積・メンテナンスまでを企業が都民に提案し、都民の人気投票によって、受注業者を決定する・・・。」

「――その与党勢力の会派代表が、次期都知事候補の斎藤 航でしょ。被害者とそれらしい噂があったんじゃないの？私もちゃんと調べてるのよ。」

「次の都知事選に出馬すれば、綾部建設が全面的にバックアップして、何が何でも当選させる腹積もりだったようです。」

「殺害の動機はその辺にありそうね、一課長に頼んで斎藤都議にアポイントを取ってみましょうか。」

斎藤 航都議とは、都議会議員控室隣の、個室面談室で話を訊くことが出来ました。被害者と同年齢のイケメンの好青年です。

「綾部法子さんとは、学部が違いますが大学の同級です。知らせを訊いてショックを受けまして・・・昨日まで議会にお休みを頂いていました。」

「公共工事の業者談合に対する反対運動を、共同でされていたとお伺いしていますが？」

「はい、あの方は綾部建設の後継者のひとりで、数年前から私の主張に賛同いただき、当事者として或いは一都民として、様々な機会と一緒に活動して頂きました。現場に一番隣接した、同志のひとりです。」

「公共工事の企画提案型の受注を目指していると・・・。」

「住民投票と連動させた公共事業の業者選定制度は、私共の会派の公約です。次回選挙に於いて、我党のマニフェストに記載されるよう運動しています。」

「まことに失礼ですが、プライベートなお付き合いされているという噂を訊いたのですが・・・。」

「まあ、そういう時期もありましたが・・・昨年の暮れ、私の方が振られてしまいました、他に意中の方がいたんだと思います。」

「綾部建設からの資金的援助は？」

「当然、個人としては受け取れませんので、党の方に寄付金とか、パーティー券とか云った形で・・・。」

「大学の学部が違くと仰ってましたが、斎藤先生のご専門は？」

「私は、理学部で非線形光学を専攻していました。綾部さんは、工学部で都市工学専攻だったと思います。」

「理系のエキスパートが、どうして政治家に？」

「基本的に、数式が苦手でした。才能が無かったんですね・・・親父の票田を引き継いで、議員にして頂きました。――もう、これくらいでよろしいでしょうか？これから都知事と一緒に、渋谷駅前街頭演説が予定されていますので。」



「綾部法子に振られたというのは嘘ですよ・・・2年位前から、若い私設秘書と付き合ってるって専らの噂です。」

「大学は、学士卒業？」

「——いえ、二人とも大学院の修士課程まで進んでいます。」

「何だか素直じゃないわね。渋谷の街頭演説、聴きに行ってみましょうか。」

渋谷のハチ公前に吹き通す風にも、秋の深まりが感じられ、屯する人々の色に、過ぎ去った夏を惜しむ暖色が広がっています。

有名な女性都知事の演説とあって、かなりの聴衆が集まっていました。

就任直後には、中央卸売市場移転に伴うごたごたや、国政への関与に於いて芳しい成果が無かった現知事ですが、2020年のオリンピックを成功させ、都の行政キャリア官僚の半数を女性とする条例、同性パートナー公認証明の交付を東京都全域に拡大する条例の可決は、それなりの評価を受け、3期目を見通しての街頭演説にも、力が入ります。

斎藤都議が街宣車の屋根の上から、タラップを登る都知事に右手を差し出します。

背後から見上げていた玲子が、「——何あれ？都議の肩の辺り、紅い点がゆらゆら？」

「レーザーポインタみたいですね・・・。」不思議そうな顔で笑子が呟きます。

知事の手を掴んで引き上げた直後バランスを崩して屋根の上で倒れます。都議と知事の体が入れ替わり、微かな失笑が会場に広がったその刹那！

眼を大きく見開いた知事の胸が眩しく輝き、真っ赤に灼熱したジャケットの下から、大量の鮮血が噴出してきました。

ゆっくりと崩れ落ちる知事の周りから、屋根の上の数人が飛び逃げ、足を踏み外して地上に落下します。

街宣車に駆け寄るスタッフに、被害者の血液が滝のように降り注ぎます。

人々が正気を取り戻して悲鳴を上げるまで、全てはざわめきの下の静寂の中での出来事でした。



翌日、カップルは東京タワーが見通せる3棟の高層ビルのうち、最も背の高いビルの、管理センターにいました。

「屋上の高さが280m、他の2棟は220mだからタワーのトップデッキに届かない、このビルに違いないわ。」

「パーティーを途中で退場した3人の内の二人を処置したクリニックも、このビルに入ってますよ。」

担当の職員が分厚いファイルホルダーを持って現れました。

「———直近の塔屋・屋上のメンテナンスですか？一週間前ですね。」

「4日前の深夜、誰か荷物をELVで運んだってことは？」

「ELVの防犯カメラを、管理センターで常時モニターしてますので、そんな事があれば気が付きます。」

「屋上に防犯カメラは？」

「出入り口の扉用に一台あるだけです。」

「今日、これから登れますか？」

「———今からですか？」

渋る職員に対して、「東京タワーの事件に関係があるかも知れないんです、其れなりの格好もしてきましたので・・・。」

「じゃ、ヘルメットをお貸ししますのでついて来て下さい。」

非常用ELVを最上階で降りると、正面の鉄扉の鍵を開けます。

「あれえ～。管理用ドアが施錠されてない、おかしいな？」

「やばい！シリンダー錠が壊されてる・・・こじ開けられたんだ、こりゃ！」

屋上に出ると秋の乾いた風が、様々な設備機器の間を吹き抜けます。

スパンドレルの開いた間から、東京タワーのトップデッキが眼下に見事に見通せました。

「ここね、間違いない、此処から撃ったのよ！」

「でも、先輩・・・直線距離で優に500mはありますよ。」

携帯電話で管理センターと連絡を取ってるビルの管理職員を尻目に、二人は周囲の痕跡に眼を凝らします。

ステンレスのパンチプレートで蓋をされた排水溝の中が、ボンヤリと光って蓋を外すと、「——わあっ！綺麗。」

蒼い蛍光が周囲に広がります。

「笑ちゃん、サンプリングして・・・。」

更に排水溝を先に進むと、黄銅色に光る金属の筒のようなものが、ドレイン目皿に引っ掛かっていました。

「——薬莢ね！」

現職都知事の死は、社会に深い不安を与えました。

その影響は東京に留まらず日本全体に及び、リスク回避の為、数多くのイベントが中止を余儀なくされました。

多くの政治家が、自身のセキュリティーを強化し、政府は要人警備の為の補正予算を組まざるを得なくなります。

東京都は当面副知事が代行しますが、早急に都知事選挙を告示し、新知事を迎える必要があります。

斎藤都議とその会派は、弔い選挙と称し、告示前から大々的なキャンペーンを展開しています。一部野党を含む保守的な勢力と、明快な対立軸を打ち立て、劇場型選挙のイメージメイクに精を出しています。



二日後、科捜研のラボから、玲子に来訪を促すメールが届きました。

「——どうやら、綾部法子氏と都知事を撃った凶器の正体を、突き止めたと考えてい

ます。」

ラボの打ち合わせブースで中年の小柄な主任研究員が、数枚のコピー用紙と試験管を傍らに、話し始めます。

「綾部さんのご家族の同意を得て、彼女が使用していたパソコン・タブレット・スマホのストレージを詳細に解析させて頂きました。自宅で使用されていたパソコンの中に、ロックの掛かったホルダーを見付けまして、何とかこじ開けて中をみると、大量の図面データが出てきました。殆どが建築や都市計画の図面でしたが、その中に他とは違うソフトで作成した特殊な光学系装置の図面があったんです。」

「断片的な図面でしたので、どういった目的の装置なのか、ずっと不明でした。一昨日、黒木さんから提出された蛍光性の液体と薬莢を分析する過程で、この図面と結び付けました。」

「液体はIEF (Impulse.Excitation.Fluid) という特殊な液体です、御覧のように衝撃を加えると、励起されて蛍光を発します。大光量のフラッシュとして夜間のスチール写真撮影や、災害時の信号弾として実用化されています。」

液体が入った試験管を強く降ると、打合せブース全体に蒼白い光が溢れます。

「この液体の顕著な特徴は、入力エネルギー (運動エネルギー) を95%という高い効率で光エネルギーに変換することです。」

「薬莢の中の装薬化学エネルギーを、実弾又は空包で運動エネルギーとしてこの液体に入力し、発生した光エネルギーを希土類ドープファイバーコアの光共振器 (キャビティ) に誘導します。媒質ポンピングによって電子の反転分布が拡がり、一気に誘導放出されて・・・。」

「―――早い話、何なんですかこの装置？」じれったそうに笑子が促します。

「簡単に云うと、レーザーによる銃です・・・。」

「―――光線銃？」

「そんな、子供騙しのような名称が相応しいと思いませんが、今回画期的なのは、必要な励起光を銃弾の運動エネルギーから取得することによって、装置そのものの大きさを決定的にコンパクトに出来ることです。一般にレーザーはエネルギー効率が悪いものですから、入力する電力は大容量となって・・・。」

「人が持ち運べる大きさで、殺傷能力があるってことですか？」今度は玲子が尋ねます。

「本体は恐らく二つに分かれます。IEFに薬莢の装薬で衝撃を与えて励起光を瞬間的に発生させる装置。励起光をキャビティに誘導して増幅し誘導放出させる装置。その間を光ケーブルで繋ぐことになります。」

「殺傷能力は、全体効率が恐らく60%程度になるでしょうから、使用する銃弾の60%程度の殺傷能力となります。」

「―――射程距離は？」

「強いレーザーは、距離による減衰が殆どありませんので、照準できる距離ならどんなに遠くても・・・。」

「最後に伺います、男性一人が担いで、長い階段を登れるような代物ですか？」

「階段の段数にもよりますが、一人じゃ無理かも知れません、介添が必要でしょうね。」

科捜研のラボを出ると、玲子が呟きます。

「一課長に頼んで社員3人の任意聴取を求めるわ。」

「パーティーを盛り上げる為だって云われたんですよ。」

桜田門の取調室です、パーティーを途中退場した綾部建設社員のひとりが、玲子の追及に少しづつ喋りはじめました。

「レーザー光線を使って、東京タワー上空に法子さん宛てのメッセージを表示するんだって……。」

「——他の二人と一緒に協力しろと？」

「仮病を使ってパーティーを抜け出し、あのビルのクリニックで治療してベッドで休んでろって。深夜になって、あの人とレーザーの装置を地下の裏口から迎え入れて……。」

「——裏口の防犯カメラは？」

「ベッドで寝ていたもう一人が、電気設備の専門ですから、配電盤から防犯カメラの信号を一時的にカットするのはお手のものでした。」

「——どうしてELVを使わなかったの？」

「ELVの防犯カメラは、別系統で信号をカットすると警報が鳴るようになっているようで……兎も角、管理センターに分かると色々面倒くさいからって、3人で階段をレーザーの装置担いで登りました。」

「——屋上に出るドアの鍵は？」

「あの人が特殊な器具を使って開けました。」

「——自宅に帰ったもう一人は？」

「法子さんの携帯に自宅の固定電話からTELして、オープンテラスに誘い出す役でした。トップデッキの中じゃ雑音が入るとか何とか言って……。」

「それじゃ、斎藤都議がレーザー装置を発射するところを、傍で見てた訳ね？」

「いいえ、見てません！法子さん宛てのメッセージは誰にも内緒だから、ELVホールで見張ってるって、ドアを閉めて屋上から追い出されました。」

「——何？何も見てないの！」

「はい、でもあんなことになるなんて……。」

「しかし、それじゃ証拠にならんな……。」

一課長室の窓から、早くなった日の入りを見詰めながら柴田が呟きます。

「分かっていると思うが、相手は気鋭の政治家だ、生半可なことじゃしょっ引けんぞ……。」

「だいいち綾部法子と、東京都知事を殺害した動機は何なんだ？」

「まだはっきりしませんが、私は政治家の二面性に、本件の動機が潜んでいるんじゃない

いかと思います。」

「——政治家の二面性？」

「政治家が、対立軸を作って政治活動をする場合、最終的な立ち位置を最初から確定させて活動する政治家は多くありません。是か非かで争う構図で、最後に鞍替えして地位を安定させる政治家は幾らでもいます。私は、斎藤都議が公共工事の入札制度の見直しや、住民投票による業者選定に本気で取り組もうとしているのか、多分に疑問を持っています。これはあくまで私の感なのですが、対立勢力に見せるもう一つの顔を持っているような気がしてならないんです。」

「日和見の顔か・・・。」

「綾部法子に対しては、彼女のパソコンの中に、レーザー銃の図面が保存されていたのが気になります。その辺り、もう少し調べてみようと思います。」



専従班のブースに帰ってくると、笑子が、「あの3人、斎藤都議の口利きで綾部建設に採用されたようです、都議に何を頼まれても、断りきれなかった訳です。それと、綾部法子のパソコンにレーザー銃の図面が入っていた理由が分かりました。綾部建設の施工技術開発部のスタッフに訊いた話ですが、建設現場でコンクリートを打って硬化させた後、鉄筋を差し込む穴を無数に開ける必要が出てくるんだそうです、通常は専用のドリルでひとつ々開けて行くんですが、20年程前或る大学の研究室と提携して、レーザーを使った穿孔機を開発したようなんです・・・。ただ、エネルギー源の特殊火薬に対する複雑な規制もあって、コスト高で中小の現場で使えるような代物じゃなかったみたいですよ。」

「それが、斎藤都議と被害者の大学？」

「そうです、その縁もあって二人は知り合ったみたいですよ。」

顔を近づけると小声で、「二人が別れた理由、何だかわかりますか？」

「斎藤都議が、秘書と良い仲になったからじゃないの？」

「コンプライアンス本部の女性スタッフから訊いた話です。本部長に就任した被害者は

、早速過去の談合事案の背景調査を始めました。すると、談合業者の背後に必ず現れるのが、野党の保守勢力の実力者と、都の或る若い官僚でした、二人は遠い親戚に当たりますが、現政権以前つまりこの実力者の政党が与党だった時代、この官僚が都に入庁しています。そして、この官僚と斎藤都議とは、異母兄弟なんです！」

「——— 何ですって！」

「だから、その辺りの事情を心得た者の間では、斎藤都議は旧与党のスパイじゃないかって囁かれていたそうです。」

「綾部法子にすると、斎藤 航の周辺を業者談合の側面から調べれば調べるほど、所属会派の主張と正反対の立ち位置、行動が見受けられる・・・当時恋人だった法子は、政治家としての変節を正面切って糺したんだと思います。」

「そうね、それが動機ね・・・でも、物証がないわ、何とかしないと。」



都知事選の告示日が迫っていました。

ここに至り、亡くなった前知事の連立与党は、斎藤都議ではなく、都職員の或る女性官僚を統一候補として公認することを決定しました。

前都知事の女性政策、LGBT政策、同性パートナーシップ政策を率先して主導してきた人物です。

統一与党幹部の判断として、談合問題で争うより、前知事の政策の継承を前面に押し出した方が、戦いやすいと考えたようです。

警視庁警備部のフロアは、告示日が近づくにつれ異様な緊張感が漂ってきました。連日刑事部との連絡会議が続きます。

「告示日の第一声、場所が何処であろうとも相当な聴衆が集まる！」

「賛否両論ある前知事の政策を継承する候補者の演説だ、聴いてる方も熱が入って感情的になりかねん！」

「そんな聴衆を、警備するだけでも大変だ！それに加えて、射程無限大の殺人光線を警備して防げと云われても、とても無理だ！」

「何が何でも、告示日までに被疑者を逮捕してくれ！」

半分喧嘩腰の会議が繰り返されます。一課長の柴田の双肩に、払いようのない重圧が掛かります。



街路樹の銀杏の、色を替える準備の音が聞えそうな桜田門です。

専従班のブースの中で、玲子が一心にパソコンの画面を見つめています。

「如何したんですか先輩？今日は朝から一步も出ないで・・・。」

笑子が横から覗き込みます。

「知事が狙撃された時の動画を見てるの、レーザーを撃った方向が分からないかと思って・・・。」

「無理ですよ、TVカメラのスローモーションでも光跡を捉えられないんでしょ？」

「ほら見て、同じ街宣車の上から撮った至近距離のスマホの動画よ、紅い点がゆらゆら動いてるでしょ、これがレーザー銃の照準だと思うの。ゆらゆら動くのは街宣車自体が人の体重で揺れているから・・・車の揺れと逆の位相で処理すると・・・。」

「———ポインターの紅い点が固定されましたね！」

「私たちの背後の、何処か固定された場所から発射されたってことよね。」

「グーグルマップで背後にある建物を探すと・・・。」

「射程が無限大だから、とんでもない数になります。」

「ストリートビューで、街宣車の位置から見通せる建物は・・・。」

「———それでも相当の数ですよ。」

「レーザーを撃って、すぐその場所から退避出来るのは？・・・男3人でやっと担げる装置を持ってよ。」

「———車、ですかね。そうか！車の中から撃ったんだ！」

「そして、車を止められる建物は・・・。」

「ひとつしかありません、この立駐ですよ先輩！」

「立駐の防犯カメラ調べるわよ！」

「———ガッテンだ！」

勢いよく桜田門を飛び出した車の中です。

「斎藤都議は今どうしてるの？」

「与党の統一候補が、あの女性官僚に決定して以降、連絡が取れないんだそうです。よっぽどショックだったんでしょうね。」

「でも先輩、防犯カメラの映像で、レーザー銃を運んだ車が分かるんですか？」

「トランクやリアシートで銃を運ぶだけってことはないと思うの、ビルの屋上と違って、車から降ろしてセットしてたら必ず誰かに見られるわ。車自体に細工して固定してるんじゃないかと思う・・・薬莢の衝撃を消音する必要もあるだろうし。」

「斎藤都議は、自分の車持っていませんよ。レンタカーにはそんな細工出来ないだろうし・・・。」

「―――共犯者の車ね、きっと。」

「でもどうして先輩は、斎藤都議が被疑者だと思うんですか？」

「―――見えたのよ！」

「見えた？」

「斎藤 航が、自分の肩の辺りにあった紅い照準の点に、前知事の背中を手を掴んで引き寄せた、直後にわざと転倒して自分は照準から外れたの……。」

開放式の立体駐車場は、6階から上のフロアで渋谷駅の現場が見通せました。ただし、設置された防犯カメラはフロア全体を監視できる訳ではなく、渋谷駅のその方向は、丁度死角になっていました。

「―――これじゃ誰が撃ったのか分からないわね。」

「ゲートの映像で、出入りした車はわかりますよ。」

事件当日のゲートの映像を片端から確認します。

「ああっ！今のハイルーフのワゴン、運転者は？」

「女ですね、サングラス駆けてます。事件発生5分後の、出口の映像です。」

「―――女？女性がレーザーを撃ったのかしら？入った時の映像は？」

笑子がスクロールして確認します。

「この日には入場していません。」

「―――知事の演説の予定が決まったのは？」

「2日前です。」

「じゃ、2日前の分を・・・。」

笑子が日付を変更すると、「ああっ！いました、2日前に入場しています。」

「男だわ！やっぱりサングラスだけど、斎藤 航に違いないわね！」

「―――思い出した！さっきのサングラスの女、あの噂のあった斎藤都議の秘書ですよ！」



3日後、都知事選の告示日です。

与党統一候補である女性官僚の街頭演説は、西新宿の都庁都民広場から始まります。

警視庁警備部はSPと機動隊を動員し、万全な警備を敷いていました。

周囲の高層ビルには機動隊を配置し、広場が見通せる窓やバルコニー全てを見張らせ、周辺の道路・ペディストリアンデッキにも、要所々に機動隊・SPを配置していました。

。与党選挙事務所の対応も、街頭演説に当たり高さのある選挙カーは使用せず、広場の地面上に低い演台を設け、その周りを高さ3mの分厚い透明アクリルパネルで囲います。至近距離からのライフル銃撃にも耐えられると云う代物で、候補者や支援者が歩く通路も同様のパネルで覆っています。

。人気があった前知事後継者の第一声ということもあって、多くの聴衆が集まっています。

それでも流石に、演台の廻りに集まる聴衆はなく、広場の周囲に一定の距離を保って取り囲んでいる状況です。

玲子と笑子もその中にいました。

「ハイルーフワゴン、やはり秘書の名義で登録されていました。」

「二人の消息は？」

「―――全く掴めません、車と共に消息不明です。」

「やる気だわ！」



候補者の演説が始まり、聴衆の歓声が上がります。

都庁周辺のケヤキ並木も、少しずつ葉に色を加え、個体によって違う赤や黄色と、まだ大半を占める緑とが、一層華やかでそれでいて物悲しく、東京の中核の季節を深めます。繁殖期を終えた椋鳥たちが、冬を見越して大きな群れとなり、人々の頭上を木から木へと忙しく飛び回ります。

ツインタワー庁舎との間の道路は、何時もと変わらず引っぱり無しに車が走り、頭上のペディストリアンデッキには一定の間隔で配置された機動隊員が、無粋な背中を見せています。

歓声が長い拍手に替わり、演説が終わったようです。

演台を降りて聴衆に手を振る候補者に向かって、一人の機動隊員がスマホで話しながら近付きます。

候補者の耳に何やら耳打ちすると、アクリルパネルをすり抜け連れ立ってこちらにやってきます。

正面を向いたその胸には、紅いレーザーの照準が！

「——笑ちゃん！」

叫ぶが早いか笑子が飛び出し、候補者にタックルして覆いかぶさります。

逃げ出す隊員を追いかけながら玲子が大声を上げます、「スマホを奪って！」

駆けつけたSPが取り押さえ、男のサングラスを外すと、「俺は、都議会議員の斎藤航だ！俺が何をした、無礼だろお前達！」と開き直ります。

鬼の形相の玲子が胸ぐらを掴んで立ち上がらせると、額に紅い照準を合わせて、「じゃあんた！そこに立って自分のスマホのホームボタン、押してみなさい！」

顔を歪め、歯を食いしばった両目から、大粒の涙が落ちてきました。

崩れるように力が抜けるのを、SPが両側から支え連行します。

「笑ちゃん、この方向よ！」

紅い照準の方向に二人で駆け出します、遙か前方の植え込みの向こうから、ワゴン車が急加速で走り去りました。

「——追尾確保、手配して！」

その時でした！

乾いた一発の銃声が、周囲に響き渡り、振り返ると警察車両の前で先程のSPたちが、血まみれで悲鳴を挙げています。

足元には、頭を吹き飛ばされた斎藤都議の遺体が、長々と横たわっていました。

「あれだけの警備の中、おめおめと狙撃させるなんて——尋常じゃないでしょ！柴田一課長！如何してなんですか！」

「分かってる、黒木。もう云うな・・・この件は警視総監から荒立てるなど云われてる・・・公安調査庁が引き継ぐそうだ。」

「——公安調査庁？」

「法務省・国家公安委員会を經由して、内閣官房長官の協力依頼があったそうだ、アンタチャブルの事案だそうだ！」

「——アンタチャブル？」

斎藤都議への銃撃は、正真正銘のライフル銃弾が使われていました。

弾道鑑定の結果、機動隊警備車両の駐車場所附近から狙撃したことが分かりましたが、結局それ以上の捜査は中止されました。

斎藤 航に関して、被疑者死亡で書類が送検されました。

本人所有のスマホと、銃撃30分後に確保されたハイルーフワゴン、及びそれを運転していた女性秘書の証言が、確定証拠となりました。

「秘書が乗っていたハイルーフワゴン、大変な代物だったそうですよ。」

女性犯罪専従班のブースの中で、笑子が玲子に話しかけています。

「屋根の大きな膨らみの中に、レーザー銃が固定されていて、斎藤都議のスマホで操作すると、天井から降りてきて車の窓を通して自由に照準出来るんですって。」

玲子が応じます。

「知事を殺害した時は、立駐にワゴンを停めて大体の照準を定めておいて、現場からスマホで精密な照準を決めた後、知事の手を引っ張って、発射ボタンを押したわけね。」

「車のウインドガラスの上げ下げもスマホで操作できるんですって・・・。」

「―――秘書の役目は？」

「立駐まで歩いてやってきて、ワゴンに乗って帰るだけです。」

「都庁の演説の時は、直前のあの場所に秘書がワゴンを乗り付けたわけね。」

「斎藤都議は、伝手を頼って機動隊の装備一式を仕入れていました。演説が終わった後、候補者に“都民広場に爆弾が仕掛けられた”と云って連れ出したようです。」

「殺害した後、騒ぎに紛れて逃走するつもりだったのね。」

「どうしてスマホが、レーザー銃の発射ボタンだって分かったんですか？」

「女性秘書に全ての運命を任せるとは思えなかったの、女を信頼できる男なら、綾部法子とも上手くやっていけた筈よ。だから、何らかのリモコン的な装置を持ってるだろうと思ってたの。」

「ひとつ解らないんですが・・・綾部法子を殺害した時、パーティーを退場させた3人の社員の内一人に、自宅の固定電話からTELさせてますがそれは？」

「3人にしっかりしたアリバイを与える為。自分の意のままに動く子分達が、逮捕されたら困るものね。」

「それにしても、後の祭りよ！全て水の泡、アンタッチャブルだなんてね！」

その時、一課長から内線コールが入りました。

二人で一課長室に出向くと、「二人とも昇進だ、黒木は警部、白河は巡査部長、おめでとう！」

鋭い眼差しで見返す玲子に、「・・・それと、ついでだが転勤もきてる、大分に来月転勤だ！」

「―――大分って、何区ですか？」

「大分県警察本部だ！栄転だあ！」



その晩の、二人のマンションです。玲子が珍しく荒れています。

「何が栄転よう！厄介払いじゃないの！」

「——辞める、絶対やめる！東京離れるくらいなら、警察辞めてやる！」

「辞めて何するんですかあ？」

「あなたの奥さんになる！」

「だったら、カップルと一緒に大分に行きましょう。」

「第一、大分って何処にあるの？」

「——九州の東海岸です。」

「電車は通ってる？車走ってるの、電気は来てるの？」

「地の果てみたい云わないでください、大分の人に叱られますよ！」

「銀座のピエールマルコリーニ・東京ミッドタウンのTOSHIYOROIZUKA・新宿のタカノフルーツパーラー……。」

「魚介類が美味しいらしいですよ、有名な関アジ・関サバの地元だし、城下カレーってのもあるようですよ。」

「酒飲みのおッサンじゃあるまいし……。」

「北の中津は“鳥の唐揚げ”大分・別府は“とり天”南の佐伯は“握り寿司に海鮮丼”が有名だって……。」

「——喰い道楽で行かされるんじゃないわよ！」

「それに、別府は日本一の温泉都市ですよ！二人でゆっくり湯に浸かれば……。」

「そうね、温泉があるわね……有名な由布院も大分でしょ。でも、温泉があるってことは、近くに火山があるってことじゃない？噴火したらどうすんのよう！」

「じゃ、やっぱり辞めますか？」

「いや、行くわ。ご期待通り田舎のおばさんになって帰ってきちゃる！」

「それに今度の件、誰の都合でアンタッチャブルになったか、時間をかけて突き止めちゃる……。」

「腹いせ……ですか？」

「何はどうにも、兎に角むしゃくしゃするわ！あなた、此処にきてお尻出しなさい！」

「———どうするんですか？」

「キュウリ、ぶっこんじゃる！」

———終わり。

以上、全てフィクションであり、実在の個人・団体と一切の関係がありません。悪しからずご承諾願います。

尚、添付しました写真は Photock 及び PhotoAC から転載させて頂きました。

．．．そして、大分へ。

<http://p.booklog.jp/book/122436>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122436>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト